

[学術論文]

親子遊びにおける発達障害を持つ子どもの動作と対人行動

A Study on Movements and Interpersonal Behavior
during Play Activities in Children
with Developmental Disorders

野中 壽子、滝村 雅人

Hisako NONAKA Masato TAKIMURA

Studies in Humanities and Cultures

No. 14

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 14号
2011年2月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
FEBRUARY 2011

[学術論文]

親子遊びにおける発達障害を持つ子どもの動作と対人行動

A Study on Movements and Interpersonal Behavior during Play Activities in Children with Developmental Disorders

野中 壽子、滝村 雅人
Hisako Nonaka Masato Takimura

要旨 本研究は、地域で行われている親子教室での観察を通して、発達障害を持つ幼児の動作や対人行動の特徴を明らかにし、集団的活動における支援のあり方について検討することを目的とした。活動内容は製作的活動、操作的活動、粗大運動的活動に分類され、それぞれに動作や対人行動の特徴がみられた。製作的活動事例では、同年齢の健常児と比較して、活動とは無関係に立ち歩く頻度が明らかに高く、操作的+粗大運動的活動では、思うような動作成果が得られない時の感情コントロールに困難さを示していた。これらの行動の背景にある心情を理解するために保護者との連携が重要であり、また、縦断的な観察の必要性が示唆された。

キーワード：発達障害、親子遊び、対人行動、集団活動

1 はじめに

2005年に発達障害者支援法が施行され、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの発達障害のある子どもの早期発見・早期支援が国および地方公共団体の責務になった。これにより、医療、保健、福祉、教育等、様々な機関が連携して乳幼児期からの早期支援にあたることの重要性が認識されるようになった。特に集団的な遊びを通して、発達障害のある子どもも他者と効果的にやりとりし、様々な刺激や経験をすることで社会的スキルを発達させていく過程は重要である。しかし、広汎性発達障害のように知的遅れがみられなくても、自然発生的には集団的な遊びは成立しにくく、遊びの意図的な介入が必要とされる^[1]。幼稚園や保育所に通う乳幼児は、幼稚園・保育所での生活を基本としながら地域での活動を通じた支援を受けられるようなシステム作りが重要であるとされるが^[2]、それは単に幼稚園・保育所と療育機関との連携ということだけではなく、その子どもが生活する地域において、集団

的な遊びを行えるような場も含めて考える必要がある。

2 目的

本研究は、学齢前の子どもとその保護者を対象に、親子が一緒に活動できる場として行われている親子教室での観察を通して、発達障害を持つ子どもの動作や対人的行動がどのように変容していくかを縦断的に検討することを目的としている。今回は縦断研究の基礎資料として、対象児らの幼児期における特徴を明らかにするとともに、この時期の支援のあり方について考察することを目的とする。

3 方法

対象は名古屋市瑞穂区内の自閉症、アスペルガー症候群と診断された幼児とその保護者の6組の親子である。月2回行われる親子教室における活動を以下のように記録し、子どもの行動分析を行った。

VTR撮影：活動場所の天井の4ヶ所に設置されたCCDカメラにより全体の様子を観察し、補助的にハンディカメラによる撮影を行った。

保護者の記録：毎回の活動について気付いたことや感想を保護者に記録してもらった。

※保護者には、事前に研究目的とVTR撮影を行なうことを説明し、同意書を得た。また、本研究は名古屋市立大学大学院人間文化研究科研究倫理委員会の承認を受けた（ID：10011）。

分析：VTR画像の分析には事象見本法を用いた。行動カテゴリーは、①求められた本来の行動から著しく逸脱した行動 ②衝動的な感情を制御できないと思われる行動 に着目して、30分の親子遊び中に出現した頻度や前後の状況について時系列で示した。

4 結果

毎回60分の活動の流れは ①始まりのあいさつ ②出席確認（返事、写真をボードに貼りに行く） ③親子遊びの導入 ④親子遊び ⑤おやつ ⑥シール貼り ⑦終わりのあいさつ であった。「次は何をやるか」の行動の見通しを持たせるため、これらの手順は、言葉と絵のカードにしてホワイトボードに貼り付けておき、1つの手順が終わるごとにカードを片付けていった。表は、2005年度1年間に行った親子遊びの活動内容を、主に出現した動作から「座って製作を行う微細運動系の動作が多い活動」「用具や玩具を操作する活動」「全身を使った粗大運動系の動作がみられる活動」「その他」の四種に分類したものである。

表 1 親子遊びの活動内容の分類

活動内容	微細	操作	粗大	他
1. 切り紙遊び	○			
2. 小麦粘土づくり	○			
3. 小麦粘土で製作	○			
4. 貼り絵遊び1	○			
5. 貼り絵遊び2	○			
6. 楽器遊び		○		
7. シャボン玉遊び		○		
8. 段ボール遊び 入って		○	○	
9. 段ボール遊び 飾って	○	○		
10. 絵の具遊び1	○			
11. 絵の具遊び2	○			
12. 葉っぱや木の実探し				○
13. みの虫坊やの家づくり	○			
14. 発泡スチロール舟作り	○			
15. 風船遊び		○	○	
16. 楽器遊び		○		
17. 小麦粘土	○			
18. 野菜スタンプ	○			
19. コマづくり	○			
20. ペットボトルボーリング		○	○	
21. 大模造紙に絵を描く	○			

活動内容は基本的に親の会の代表者が中心となって決定されているが、微細運動を中心とした製作的活動が多く、全身を使う粗大運動系の活動は少なかった。活動種類別にみた対人行動の特徴としては、製作的活動は、用具の把持や操作が未熟である場合でも、保護者やボランティア学生の援助や指導がすぐに得られる状況であり、黙々と活動を行っており、他児とのかかわりはほとんどみられない。操作的活動は、玩具の貸し借りを行なったり、用具を使つてのゲーム場面で他児と競い合ったり、という他者とのかかわりがみられるため、トラブルが発生しやすい活動であった。粗大運動系の活動は、身体接触が生じやすくゲーム的要素もあるため、本来はトラブルが発生しやすい活動といえるが、この年度の活動では身体接触が多い粗大運動系活動はみられなかった。これらの活動が展開される中で、特に他児との競争場面で感情の抑制が困難になることが多いA児について、製作的活動と粗大運動系の活動事例を検討して、動作や対人行動の特徴を検討した。

事例1 製作的活動：絵の具遊び（2005年9月）

(1) 観察された対象児の行動の特徴

活動に入る前や活動の転換時に、周りに立てかけてあるテーブルや窓枠によじ登るなどの逸脱行動がみられた。しかし、周辺部にいながら、視線は今日の活動を説明している指導者やそれを

座位で聞いている他児達に向けられていた。その後、製作が開始されると自分から活動に戻っていき、しばらくは割り箸に布を巻きつけた筆で絵の具遊びを黙々と行っていた。途中で、思っていたようにできなかったことが原因で集中力を失い、立ち歩くことが多くなった。実際に同年齢の健常なB児（他児のきょうだい）に比べて、立ち歩く回数は顕著に多かった。

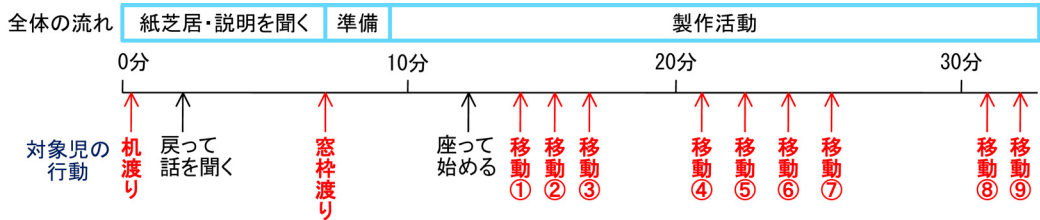


図1 製作的遊びでみられた対象児の行動（絵の具遊び）

事例2 操作的・粗大運動系遊び：ペットボトルボーリング 2006年3月

(1) 観察された対象児の行動の特徴

説明を聞いてからくじを引いて投球の順番を決め、順番の札を首から下げようにした。数字の書いてある紙を予め床に貼っておき、首から下げた番号札と見比べて一致する数字の上に立つ、という方法が示された。健常なB児のサポートもあり、順番は途中までなんとか守れていたが、途中で割り込もうとする行動もみられた。

B児に比べて倒れる本数が少ないためか、「もういやだ！」と何度も大声を上げて感情を爆発させそうになっていたが、なんとか抑制していた。しかし、最後の結果発表の後で「あー、もう我慢できない！」と、並べられたピンに向かってスライディングをして、全部倒してしまった。

(2) 保護者の記録

数日前に家族でボーリングに行ったので、今回の活動には期待していたことでもあり、楽しかったと言いつつ「倒せなかったのがくやしかった」と感想を述べていた、とのことであった。



図2 ゲーム的遊びでみられた対象児の行動（ペットボトルボーリング）

5 考察

学童期に発達障害に気づくのでは、二次的な不適応の状態にすでになっていることが多く、遅くとも就学時には保護者も指導する側にも子どもの発達特性に対する認識と対処方法が備わった状態であることが望ましいとされる^[3]。しかし、広汎性発達障害や注意欠陥／多動性障害などは、逸脱行為が頻繁にみられる、指示が浸透しないなど、集団生活を始めるようになって問題が顕在化することが多い^[3]。

事例1にみられた窓渡りや机渡りは、身体を腕だけで支えながら移動するという運動強度の高い動作であり、危険を伴う行動でもあり、衝動的に動く傾向が制御できていないことを示していると思われる。対象児は、特に活動に入る前や活動の転換に適応するのに時間がかかると推察され、そのための時間や場を補償する必要がある。また、全身を使った活動で発散させてから活動に入る等の配慮が必要である。

事例2では、ルールを守ることについて視覚的に分かりやすい方法で具体的に提示すれば、それほど困難なことではなかった。これは、本研究で取り上げた親子教室は、健全なきょうだいが一緒に活動をし、保護者もすぐそばにいるという安定した状態で活動が進んでいくので、多少の混乱や葛藤状態は、むしろ社会的スキルの発達のために必要と考えられる。そのためには、粗大運動系の動作を含んだ、ルールがある、ゲーム的活動を積極的に取り入れることが有用であると考えられる。一方で、社会的スキル獲得の段階に応じてルールを守ることの伝え方も変化させる必要がある。

保護者の記録によると、帰宅後の対象児の感想から上手くできなかったことに対して「悔しかった」という感情はあったようであるが、感情を爆発させるのをなんとか抑制しようとしていた様子が窺える。廣田ら（2008）は、感情のコントロールが困難であるなどの行動の背景には、課題をするからには完璧でなければいけないという内的な対人ルールがあるとしている^[4]。支援のあり方としては、場面を解釈し意味づけを行う個人の内的対人ルールに焦点をあて、このルールを変化させることで多くの場面に対応可能となることを示唆している^[5]。本研究の場合、保護者の記録に「できなかったのが悔しいと言っていた」「もっとやりたかったようだ」など、子どもの行動の背景にある心情を読取れる記述があり、家庭に帰ってからの様子を保護者に記録してもらい、子どもの気持ちを聞いてもらうなど、支援のあり方を考える上で、保護者との連携は不可欠であると考えられる。

今回取り上げた親子教室は、親やきょうだいが一緒に活動をするが、同年代の他児やその保護者、指導者がいるという点で、人的環境としては家庭と幼稚園・保育所の中間的性格をもつと考えられる。また、療育の場とは異なり遊ぶこと自体を楽しむのが目的とされているが、社会的認知や対人関係における困難さは、社会的・集団的生活の場面において克服されるものである^[6]ことから、保護者がすぐそばにいるという安定した状態も確保しつつ、他の子どもやその保護者、

学生ボランティアなど、他者への関わりを拡げることが可能であるこのような活動の場は貴重であると考え。観察した幼児らには、自分の興味のあることにこだわる、集団行動が苦手、順番を待つなどのルールを守れない、かんしゃくを起こす、高いところに登りたがる、等の行動の特徴がみられたが、活動終了後、子ども達の関心が高い室内用滑り台を利用して「滑る時は、先生とタッチしてから」などのルールを設定してみたところ、対人行動がほとんどみられなかった子どもでも、促されれば要求された行動が取れるようになっていった。発達障害をもつ子どもにおいても、短期間で変容がみられるが、「年齢が上がっていくにつれて変化のある存在と考えるべき」^[7]という視点で、幼児期から学童期へ縦断的な考察を加えていくことが、今後の課題である。

参考文献

- [1] 竹内謙彰：広汎性発達障害児のニーズ理解と9, 10歳の発達の節. 心理学, 第30巻、第2号、11-22、2010.
- [2] 渥美義賢、笹森洋樹、後上鐵夫：発達障害支援グランドデザイン. 国立特別支援教育総合研究所紀要、第37巻、47-70、2010.
- [3] 小枝達也：軽度発達障害児について. 小児保健研究、第66巻、第6号、733-738、2007.
- [4] 廣田寛子、廣田信一、堀あずさ：軽度発達障害児の対人ルール形成に関する検討(2). 日本心理教育学会発表論文集(50)、632、2008.
- [5] 廣田信一、廣田寛子、堀あずさ：軽度発達障害児の対人ルール形成に関する検討(1). 日本教育心理学会発表論文集(50)、631、2008.
- [6] 代田盛一郎：軽度発達障害児を含む遊び活動への支援に関する考察にむけて. 大阪健康福祉短期大学紀要、第7号、165-173、2008.
- [7] 市川宏伸：発達障害の現状とこれから. 学校メンタルヘルス、第12巻、第2号、9-15、2009.